

ニューズレター 第10号

大阪学院大学外国語学部

外国語学部は実績主義

—夢を実現した先輩に続いて下さい—

2016年3月19日発行

外国語学部における人材の養成、 教育研究上の目的

外国語によるコミュニケーション能力、幅の広い教養を修得し、語学のエキスパートでありながら、豊かな人間性と幅広い教養を兼ね備えた人材の育成をめざす。

憧れのJリーガーに

河合 秀人さん（2016年3月英語学科卒業。2016年4月より ガイナーレ鳥取 に加入予定。）

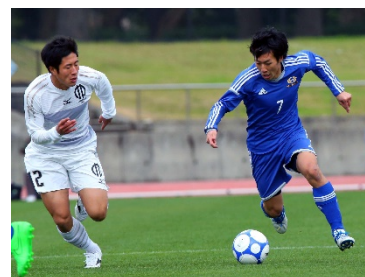


私は、外国語学部での学業とサッカー部での活動を両立させ、間もなく卒業しますが、卒業後は、J

リーグに加盟するプロサッカークラブ、ガイナレ鳥取に加入することが決定しています。

大学生活全体を振り返ると、ひとことで言って、

サッカーを通じて色々な人達と出会い、人間性の部分を大きく成長させてくれた4年間でした。



私とサッカーの出会いは、父がサッカーをやっている影響でした。子どもの頃、無我夢中で毎日ボールを追いかけていたのを今でも覚えています。大学でも当然、サッカー部に入部しました。大学に入って最初に出会った困難は、1回生の時、サッカーの試合に全然出られず、Aチームさえも入れず、ずっと下のチームでやっていたことでした。つらかった時期にもう一度初心を思い出そうと思い、また一日一日努力を続けた結果、夏にAチームに上がり、試合にかかわることができました。

大学生活全体の中で強く心に残っていることは、やはり4年間続けたサッカーのさまざまなシーンが占めています。特に、4回生の時、最後にインカレに出場することができたことが最も思い出深い出来事でした。結果は初戦敗退という苦しい結果になってしまいましたが、これからのサッカー人生に必ず良い経験になることは間違いないと思いました。このインカレでの経験は大学生活で一番悔しい思いをした出来事でもありましたが、同時に、サッカー人生で初めて全国大会という舞台に立てたという意味で、とても嬉しく大学生活で一番心に残ったことでした。

このように、サッカーに全力で取り組んできた一方で、私は外国語学部での英語の勉強にも力を入れてきました。大学進学に当たって、英語を勉強しようと思ったのは、将来絶対に何らかの形で



英語が必要になるときが来ると思ったからです。英語を学ぶことで将来、サッカーにも役に立ち、自分のためにもなると思いました。

大学に入って最初に感じたことは、高校と違って、自由な時間が増えていく分、時間を今まで以上に大切にしていけないといけないということでした。また、サッカー部に私と同じ学年の外国語学部の学生がいなかったことに驚きました。サッカーの活動と外国語学部での英語学習を両立するため、限られた時間の中でどのようにして時間を有効に使うかを意識して部活と勉強に取り組みました。授業時間を大切に、授業中集中してやることで部活と勉強を両立できたと思っています。また、大学生活を送る中で、何事も最後まで諦めずにやることで目標を達成できることを学びました。

英語の勉強で苦心したことは、外国人の先生との英語の授業でした。日本語で言っても伝わらないので、どのようにして英語で考えを伝えるか、真剣に考えました。そのためには英語の知識が必要になってくるので、その勉強には苦しみましたが、少しずつ努力することで慣れていきました。なるべく毎日英語の単語や文章を読むということを心がけました。英文を読むことで英語表現を覚えることができるので、英文を何回も読んで頭に

入れようと努めました。

英語の勉強で、特に興味を持ったことは、英語での会話です。他の人たちと英語で会話することは大変勉強になりましたし、また、実際とても役にも立ちました。将来、海外遠征に行った時や海外のチームでプレーするような機会に恵まれた際に困らないくらいの英語でのコミュニケーション能力を習得したいと思っています。

大学に入って、それまでと比べて自分自身が変化したことがあります。サッカーのプレーはもちろんです、人間性が大層成長できたと思っています。人としてどうあるべきなのか、どうならないといけないのかなどを考えるようになりました。



卒業後は、プロのサッカー選手としてやっていきます。必ず大阪学院大学の卒業生として恥ずかしくない、誰からも認められる選手になりたいと思っています。日本サッカー界を代表する選手になりたいと思っています。最後に、今まで支えてくださった皆様、本当に感謝しています。プロ選手として頑張っていきますので応援よろしくお願いします。

(カワイ シュウト)

高校生に伝えたいこと： 時間の大切さ

西田 勇哉さん（英語学科 2015 年 3 月卒業。2015 年 4 月より星翔高等学校（大阪府） 英語科非常勤講師）



私は2015年の4月より、大阪府摂津市にある星翔高等学校にて非常勤講師として英語を教えています。人

に何かを教えるということは簡単なことのように思えますが、実際に教えるはじめるとそう簡単なことではないことを実感しています。高校3年生の頃から英語の教員を夢みて大学に入学し、4年間という「長く短い」歳月を大阪学院大学で過ごしてきました。その中で得たものは、今を生きる上で非常に有益なものばかりです。自分のやりたかったことを、今やらせてもらっている私が、この大阪学院大学でどのような生活を過ごし、どのようなものを得たのか、皆さんとシェアしていきたいと思います。

私はこの大学に入学する前から、英語教師の夢を追いかけていました。とは言え、高校生活で培える「英語力」には限界がありました。英単語は参考書や辞書を調べれば身につくかもしれませんが、コミュニケーション能力という観点で見ると、周りに外国人はいないし、今のようにスマー

トフォンもありませんでした。高校を卒業して初めて、「英語は実際に使うことができなければ本当の意味がない」と感じたのです。確かに英単語や文法を勉強して、学校のテストで点数は取れるかもしれませんが。ですがそれを使って英語圏の人といろいろな話をしたり、旅行や留学に行って、現地の人とコミュニケーションをしたり、異文化を理解したりすること、それこそが英語の醍醐味だと今では思います。「英語を話せるようになること」をゴールに設定するのではなく、「英語を使って何をしたいか、何を伝えたいのか」を明確にしておく、英語の勉強もより捗るのではないのでしょうか。

大学生生活で学んだことの一つに、「時間管理の大切さ」が挙げられます。大阪学院大学には、学内にいながら留学を体験できる施設 (I-Chat Lounge) があると聞き、私は入学してすぐに興味を惹かれました。ですが、そこから実際に足を踏み入れるまでに1年半も掛かりました。外国人ばかりのその空間に、恥ずかしくて入ることができなかったのです。ですが、優しい外国人スタッフが気軽に話しかけてくれて、ようやく入ることができました。そして「自分は英語を勉強したいのに、なぜ恥ずかしがっていたんだろう」と後悔しました。自分の目標を達成するために、周りの視線は関係ありません。 I-Chat Lounge に通い始めてから、



高校の教え子たち：
中央が西田さん

勉強も趣味もアルバイトでも「いま自分が何をすべきか。そしてそのためには今自分がどうあるべきか。」を常に考えて行動するようになりました。これは私の人生の中で大きな転換点になりましたし、その考え方はこれからも変わりません。want (したいこと) よりも must (しなければならないこと) を常に優先していけば、時間をどう使うべきかが自ずと導き出されていくのではないのでしょうか。

そして何よりも私の4年間の大学生活で1番に力を注いできた教職課程の授業では、本当に為になる経験をさせて頂きました。様々な観点から「教育」を考えるこの教職課程は、非常に益になるものばかりでした。特に4年間ずっとお世話になった、外国語学部英語学科の中田先生には感謝をしてもしきれません。先生のお陰で私は4年間、教職への道を諦めずに頑張ってこられたと言っても過言ではありません。

中田先生は、常に私たちに対して「教師力」、「授業力」、「英語力」の3つに焦点を当てて授業をしてくださいました。発音指導や授業構成、教師としての魅力を備えておくこと等、その他にも人としてのマナー(時間を厳守することや報・連・相)など、挙げていくときりがありません。時には忌憚りの無い意見を頂くこともありました。ですがそれを真摯に受け取ることにより、「自分はもっと良くなれるんだ」と改善に努めることが出来たのです。意見をいつもとは違う観点で受け取ることも大切だなと感じさせられました。システムティックに展開される中田先生の授業では、先に述べた「時間管理能力」も学ぶことができました。他の授業でも、社会を生き抜く上で大切なことを多々

教わり、僕の財産になっています。

そして、これは教職に進む人に限らずどんな方にも言える事ですが、夢を持ち続けて下さい。そして、それを追いつけて下さい。そうすることで、皆さんの人生のキャンバスには下絵が描かれます。その下絵を何度描き直しても良いのです。大切なのはそれを完成させるために、「どのような色を、どのようなツールで、どのように塗っていくか」です。理想通りに描ける箇所もあれば、はみ出したりムラが出来て失敗することもあります。しかし時間をかけて完成させたその絵は、きっと皆さんの宝物になると思います。組み合わせを変えることで何通りも未来が変わってくるので、いろいろなことに挑戦しましょう。その挑戦があなた自身と未来を変えるのです。

最後に、“*Time is money.*” (時は金なり) ということわざがありますが、時間とお金とは大きく違うところがあります。それは「時間は貯蓄できないこと」です。何をしても流れていく時間を、私たちは大切に使う必要があります。今この時間を有効に使うかどうかで、皆さんの未来が変わってくると思います。今この文章を読んで下さっている方々には、この時間が有効に働いていくかどうかは私には分かりませんが、この文章を読んで、何か皆さんの中でプラスに変わったことが1つでもあれば幸いです。

(ニシダ ユウヤ)

就職活動は私にとって 一番の自分探しの旅

辻 裕貴さん（2016年3月英語学科卒業。2016年4月より ヒューマンタッチ株式会社 に入社予定。）



私が就職する会社はヒューマンタッチ株式会社という人材事業を展開している企業です。人材業界と言っても仕事内容は様々です。1) 短期的に戦力が欲しいクライアント（企業）に人を派遣する人材派遣 2) 今の仕事から転職したいと考

えている人と、新しい人手が欲しいと考えているクライアントを結びつける人材紹介 3) クライアントの仕事の一部を代わりに行うアウトソーシング — 以上が人材業界の仕事のメインと言えます。私の就職する会社はヒューマングループの子会社の一つです。世のため人のためという意味である「為世為人」という価値観を非常に大切にしており、私欲ではなく他人のために自ら動き、人の人生をより良くでき、人間味あふれる環境に魅力を感じ入社を決めました。

私が就職活動を始めた時やりたい事や成し遂げたい夢はありませんでした。人の前で発表したりすることが好きだったので初めは教育業界を考えていました。しかし自分の中でじっくりくるもの

がなく自分は何がしたいのか全くわからなくなっていました。それでもいろいろな話を聞けば自分に合った企業と出会えるかもしれないと思い、がむしやりに会社説明会に参加したこともありました。今思い返せば累計40～50社以上の会社説明会に参加したと思います。

ある日キャリアセンターの方の「あなたがたとえお金が貰えないとしてもやりがいを感じることはある？」という言葉が心に響き、自分はどんな風に生きてきたか？ 自分はどんな人間か？ など自己分析を突き詰めたことで、過去にバラバラな人間関係をまとめたエピソードを思い出し、私は人と人を結びつける事がやりたいと気づき、見据える道が教育業界から人材業界に変わりました。私自身中学、高校共に部活動に励んでおり勉強はほとんど打ち込んでいなかったのもので大学では勉強を頑張りつつ、遊びも充実させようと考えていました。幸い大学では勉学に打ち込むことのできる設備や環境が整っており、あまり勉強の好きではない私でも打ち込むことができました。それまでは先生に言われたことを実行しかしていませんでしたが、目標に向けて自分に何が足りないのか、それを補うのに何を必要とするのかなど、自分で考え実行する力が付きました。内定先の社長と



後輩に就職活動のアドバイスをする辻さん

の面接の際に、その考えは社会人として仕事を
する際に非常に大切だと言われ、社会人になるに向
けて良い考えを持って良かったと感じています。

学生生活では勉強するときはする、遊ぶ時は遊
ぶと、オンとオフを切り替えて過ごしました。1
年次の夏には留学生とコミュニケーションを取る
ボランティア活動に参加しました。勉学ではゼミ
の教授に定期的に勉学の指導をしていただき積極
的に取り組むよう努力しました。

今、夢や目標がある人はそれに向かって励んで
ください。たとえ今はなくても自分にしかないエ
ピソードを持つために何か一つ頑張ることや励む
ことを決めて打ち込んでみてください。それが達
成できた暁には他の誰にも負けない自信や武器に
なります。今、採用を大学名だけで判断する企業
はほとんどいなくなっていると思います。逆
に言えば、人物本位、人柄重視で、企業及び社会
に貢献できる人物が求められています。学生にと
っては自分が絶対負けない自信や長所があれば打
ち勝つことができるということです。夢は諦める
ものではなく叶えるものです！みなさんが望んだ
道につけることを願っています！！

(ツジ ユウキ)



ホテルマンとして 日本の美德を発信

福居 春日さん (2016年3月英語学科卒業。在学中
の2014年フランスのオルレアン大学に交換留学生
として派遣される。2016年4月より 帝国ホテル大
阪 に入社予定。)



皆さんこんにち
は。この度は外国
語学部発行の『ニ
ューズレター』な
らびに私の記事に

目を通していただきありがとうございます。

私は2016年3月の卒業後、帝国ホテル大阪のホ
テルスタッフの一員として晴れて社会人となりま
す。明治時代に日本の迎賓館として誕生して以来、
125年もの間、国内外を問わず多くのゲストをお
迎えしてきた歴史と伝統のある企業から内定をい
ただいたとき、私がこれまで培ってきたこと全て
が報われたような気がしました。私が幅広く学び、
たくさんの人との出会いのなかで様々な経験を積
み重ねてこられたのは、多彩なシーンを展開する
大阪学院大学だからこそです。その一つとして、
他学部の科目も履修することができる制度を利用
して、外国語学部にて在籍し英語やフランス語を集
中的に学びながら、ホスピタリティ経営学科の科
目でホテルビジネスや実用的なマナーを学んだこ
とは、私の学業に対する大きなモチベーションと
なりました。今後は、私がこれまで学んできたこ

とが内定先の様々な場面できっと役に立つことでしょう。その中でも、外国語学部生として培った外国語運用能力や留学先のフランスでの経験は生涯の強みになると感じます。

私は2014年8月から翌年6月までフランスのオルレアン大学に留学していました。パリから電車で約1時間の距離に位置するロワレ地方の町オルレアンは、大西洋からのあたたかな風が周辺の谷や川を吹き抜けるため、温和な風土と豊かな食材に恵まれています。そんなオルレアンでの生活は、到着当初こそ日本との気候の差に戸惑ったものの、慣れてしまえばこの上なく勉強に適した環境でした。さらに、この居心地の良さは気候の為だけでなく、感じのいい人々や充実した学内環境のおかげが大きなものだと感じました。

オルレアン大学には日本語学科があり、日本語を学ぶたくさんのフランス人学生と交流ができます。交流の場として図書館は最もポピュラーで、図書館に行ったら課題をし、友人たちとおしゃべりをしていました。こうした異文化交流の面白みのひとつは、外国語だけでなく自分たちの言語について再認識するきっかけに出会える点だと感じます。日本語といえば、私はフランスで学外活動として日本語指導サポーターのボランティア活動



後列中央が福居さん

に参加していました。日本の文化を紹介する際には、私は空手のプレゼンテーションをしました。フランスにおける空手の競技人口や2020年オリンピック正式種目化の話題性、そして何より自分



が経験者であるという理由で、魅力を最大限に引き出せると思ったからです。このように海外で日本を発信できたことは、その後の私の考え方や進路に大きく影響しました。

そもそも私がフランス語学習を始めたのは、フランス語を公用語とするアフリカ諸国での開発支援に携わりたいと思ったことが理由のひとつにありました。言うまでもなく留学は実用的なフランス語の習得、そしてフランスの文化的魅力やヨーロッパの宗教観に触れるためです。その実現に向けて大学生活では語学はもちろん、宗教学や国際支援に関する授業も積極的に履修しました。またフランス語検定^{*1}やTCF^{*2}への挑戦からも大いに刺激を受けました。試行錯誤を繰り返しながら留学出発まで貪欲に知識を求めていました。そしていざ現地での生活を過ごしていると、フランスの素晴らしさに魅了されたとともに、日本の美德を再認識し日本で自分たちの国の魅力を発信したいと強く思うようになっていました。このことから帰国後の就職活動ではホテル業界を中心に活動を進め、その結果、帰国から3ヶ月が経った9月中頃、念願だったホテルマンへの道が拓けたのです。

このように、大学の4年間は目まぐるしいもので、環境や目標もまた千変万化しました。私は、留学先や大学生活で良縁に恵まれたおかげで、訪れる天命に向けて人事を尽くすことができました。たくさんの出会いや経験、そして何より感謝の気持ちを重ねることが、人生を豊かなものにする大切な要素であると、学生生活を通して改めて学びました。実際、この『ニューズレター』は先輩方や私の思いや経験が込められた皆さんへの手紙ですが、至るところにお得なヒントが散りばめられていることに、皆さんは既にお気づきのことでしょう。こうして最後まで目を通してくださった皆さんの心に、わずかでも残るものがあれば、この上なく嬉しく思います。

(フクイ ハルヒ)

※¹ 実用フランス語技能検定試験：公益財団法人フランス語教育振興協会が実施するフランス語の検定試験

※² Test de connaissance du français：フランス国民教育省が認定した、フランス語を母語としない者を対象としたフランス語能力試験



編集後記

私事で恐縮ですが、不覚にもこの1月に転倒し、左肩を骨折し、手術をしました。退院してから2か月経つ今も、まだ左肩および左腕の運動機能が回復せず不自由な生活を送っています。

怪我をして強く認識したのが、当然のことながら、健康の大切さとありがたさですが、その思いとともに、初めて気づいたのが、「なんと腕や脚に障害や不自由さを抱えながら暮らしている方々が多いことか」ということでした。街を歩いていると、足を引きずりながら歩いている人、三角巾で腕を吊っている人、松葉杖をついている人、歩行器を使って移動している人・・・をよく見かけました。病院やリハビリ施設でこういう方々を見かけたというのではなく、通りやショッピング施設や駅など、日常の生活の場面においてです。一時的な怪我の方もいらっしゃるでしょうし、完治は難しい方もいらっしゃるでしょう。でも一様に、皆さん不自由な身体でありながら、毎日を精一杯頑張って生きていらっしゃるように思えました。

よく考えてみれば、こういった人々が最近になって急に増えたわけがありません。以前から私の周りにいらしたはずですが、私には見えていなかったのです。自分が怪我をして、肩や腕を思い通りに動かすことが出来なくなって初めて、同じように不自由な生活を送っていらっしゃる方々の存在に気づいたのでした。

米国の人種差別社会の苦悩を描く、ラルフ・エリソンの小説 *Invisible Man* (見えない人間) の中で、黒人の主人公は “I am invisible ... simply because people refuse to see me.” (僕が見えない存在なのは、人々が僕を見ようとしないからだ) と言っています。私たちはともすると社会的に弱い立場の人々を見ようとしない、もしくは見えていないということがあるのでないでしょうか。そうであれば、弱者を見ようとする努力、発見する感性を養うことが肝要です。特に、これから社会に羽ばたき、これからの日本を担っていく若者たちにはこの事を心に留めておいて欲しいと思います。

(YK)

ニューズレター 第10号

発行 2016年3月19日

発行者 大阪学院大学外国語学部

発行者住所 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目 36-1

(電話) 06 (6381) 8434

(学部 URL) http://www.osaka-gu.ac.jp/dhp/gaikokugo_gakubu/